

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：37302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730558

研究課題名(和文) 広汎性発達障害における情動機能と自己の発達

研究課題名(英文) Development of emotional function and of self among Pervasive Developmental Disorder

研究代表者

中村 真樹 (Nakamura, Maki)

長崎純心大学・人文学部・講師

研究者番号：80531780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自閉スペクトラム症(研究開始時は広汎性発達障害、以下ASD)の児童と成人を対象とし、自己理解に関する調査研究及び心理劇の実践を通して、情動機能と自己の発達について検討した。その結果、ASDの情動機能と自己の発達について、(1)臨床実践及び質問紙調査等の多様なアプローチの有効性(2)定型発達との比較検討によるASDにおける自己理解の特性(3)生涯発達の観点による支援の重要性(4)心理劇による支援の有効性が示された。

研究成果の概要(英文)：The present study examined the development of emotional function and of self among children and adults with autism spectrum disorder (ASD) through self-understanding inquiry as well as psycho-drama. The main findings of the study were as follows: (1) multifaceted approach such as clinical practice combined with the questionnaire method is effective on this research topic; (2) comparing ASD with the typically developed, distinctive character of ASD on self-understanding were shown; (3) it is important to consider life-span development on support for ASD; (4) psycho-drama is effective support method to develop both emotional function and self among ASD.

研究分野：教育心理学，発達心理学，障害児心理学，臨床心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 自己理解 情動機能 心理劇

1. 研究開始当初の背景

本研究は、昨今の保育・教育領域を中心とする発達障害児・者への支援の必要性を背景とするものである。特に、自閉スペクトラム症(研究開始時は広汎性発達障害、以下 ASD と表記)については、情動共有を含めた相互主観的経験の保障に加え、自己同一性の確立や自己理解という観点による支援の重要性が指摘されてきた。

以上の知見より、ASD の社会性の障害については、認知能力により補償できない点を明らかにしつつ、情動機能の発達の様相を理解しながら情動的側面に働きかけていく支援と自己の発達に働きかけていく支援について検討することが重要であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ASD における「情動機能と自己の発達」について、ASD の児童・成人を対象とした心理劇による臨床実践及び自己理解質問等の調査研究を通して検討し、ASD への生涯発達支援に関する知見を提供することである。臨床実践及び調査は、同一の対象者に対して継続的に行われたものを分析対象とする。第一研究では、児童を対象として個人における発達の变化について検討した。第二研究では、児童と成人を対象とし、両群を比較することにより、それぞれの発達段階における特徴及び生涯発達を視野に入れた変化について検討した。第一研究及び第二研究を通して、児童期、成人期という発達段階における有用な支援の在り方や、児童期から成人期に向けた支援の在り方について検討した。

3. 研究の方法

第一研究 (24 年度～27 年度) ASD 児における情動機能と自己の発達の関連

1. 対象: A 県の児童発達支援センターを利用している ASD 児 (12 名)

2. 手続き: 月 2 回約 45 分の心理劇セッションにて参与観察を行い、セッションは VTR にて記録を行った。セッション後のミーティングで、対象児の発言と行動及び学校や家庭における特記事項について記録した。定期的に自己理解に関するインタビュー(滝吉・田中、2011 を参考)を行った。情動機能と自己の発達について、「個人内の変容過程」、「両者の関連」について分析した。

第二研究 (24 年度～27 年度) ASD 児における情動機能と自己の発達～成人期と児童期の比較～

1. 対象: A 県の児童発達支援センターを利用している ASD 児及び A 県の指定障害者支援施設・障害福祉サービス事業所を利用している ASD 者 (各 12 名)

2. 手続き: ASD 児については第一研究と同様。ASD 者については、社会適応訓練キャンプ(毎年二泊三日、6～9 セッション)及

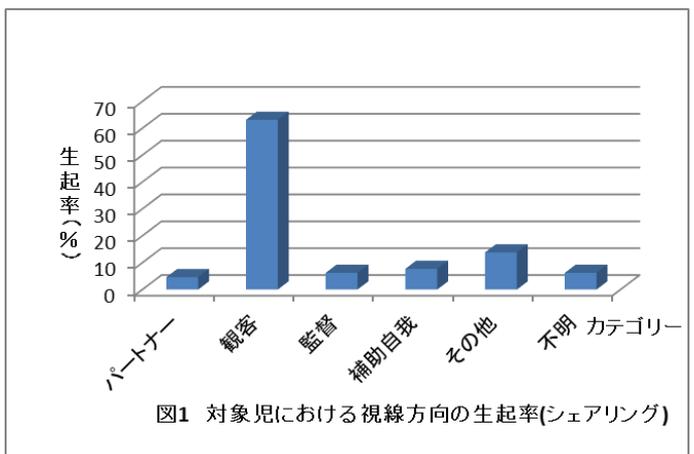
び施設で行われる心理劇セッションを VTR にて記録し、自己理解に関するインタビューを行った。発達の視点から情動機能と自己の発達について、「個人内の変容過程」、「両者の関連」について分析した。

4. 研究成果

(1) ASD 児における情動機能の発達について

支援内容の検討 ASD 児の情動理解及び情動表現を目的とした療育者の支援内容について検討した結果、以下の点が明らかになった。1) 療育者は、いずれの時期においても観客である対象児への質問や、発言内容の繰り返しを行う頻度が高い。2) 療育者は、表現された情動について正当を教えるのではなく、観客が療育者とのやり取りの中で情動について理解を深める支援を行っている。3) 観客の発言を繰り返す際の療育者の発言は、情動の類似性や多様性に言及する内容である。4) 療育者の発言数は、グループの成熟度と関連している。

児童間の相互作用 「気持ちの理解」をテーマとした心理劇のシェアリング(単独セッション)について時系列分析を行い、主役を演じた 2 名の「表情」及び「視線の方向」と、心理劇の監督による「動作」及び「発語」の同時生起率を算出した。その結果、シェアリングにおいて主役の視線は観客に向けられている時間が最も長く、さらにその際にポジティブな情動表出が見られる割合が高いことが示された(図 1)。さらに、2 事例(1 年間にわたる継続的セッション)を対象に児童のポジティブな情動表出と視線の方向について時系列分析を行った結果、児童のポジティブな表情とグループのメンバーに対する視線に関連が示された。



(2) ASD 児における自己の発達について
定型発達児との比較

ASD 児の自己理解について定型発達児と比較検討した結果、他者とのかかわりにおいて自己をどのように理解するのかという点において違いが見られた。ASD 児においては、他者の存在や影響を考慮せず、自己をとらえ

るという特徴が示された。一方、定型発達児においては、他者との相互作用が自己理解における重要な視点となり得ることが推察された。今回の結果は、ASD 児が他者との相違点について自ら意識することが少ないことを示していると考えられる。他者との相互作用において共通点への意識を促す等のかかわりが、ASD 児の自己理解の発達を支える上で重要である。

ASD 児における個人内の変容過程

児童期を通じた自己理解の発達について自己理解質問とバウムテストを用いて検討した。1) 自己理解質問については、年齢による自己理解の深まりが観察され、個人内の発達的变化が示された。さらに、支援者がポジティブな自己評価につながる具体的な関わりを行っていくことが重要であることが示された。2) バウムテストについては、知的発達水準による比較を行った結果差は見られず、外界への適応という視点から描かれた木を理解することの重要性が示唆された。

宿泊型療育の意義 単年度の宿泊型療育における 6 名の児童について経過を分析し、療育キャンプの要素がどのように児童の自己の発達に作用するのかを考察した。児童の自己の発達においては、1) 療育キャンプのプログラム、2) 学生ボランティアとの相互作用、3) 時系列的变化の 3 点が重要であると考えられた。

心理劇を通じた変化の検討 多面的自己理解を目的とした 3 年間にわたる心理劇場面の分析を通して検討した。9 名の児童を対象に分析した結果、客観的自己理解の深まりが観察され、自身の行動及び心理の両面に着目し、自己を理解できるようになることが示された。

(3) ASD 者における情動機能の発達について

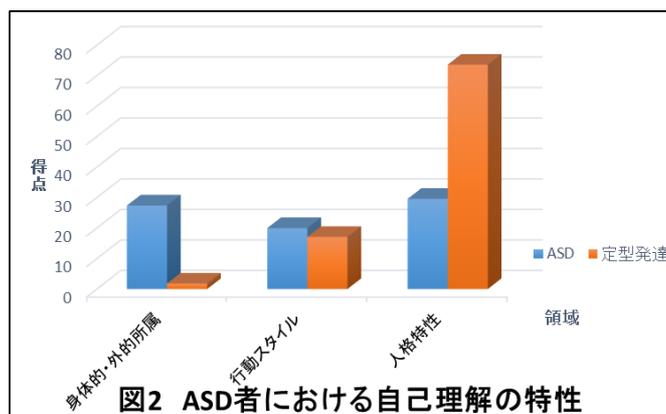
社会適応訓練キャンプにおいて実施した心理劇セッションの分析により、ASD 者においては、1) 過去 - 現在 - 未来という時間軸における自己、2) 親との関係、3) 社会的自立が重要なテーマであり、これらのテーマを通して自己感情の理解及び家族をはじめとする身近な他者の感情理解に深まりが見られることが示された。

(4) ASD 者における自己の発達について

定型発達との比較 ASD の成人と定型発達成人に自己理解質問を実施し、成人の自閉 ASD における自己理解の特徴について検討した。その結果、1) 定型発達と比較すると、ASD の成人は人格特性等自己の内面について説明することが難しいことが示された(図 2)。このことから、自己の内面の表現に重点をおいた積極的取り組みの重要性が示唆された。2) ASD の成人は、自身の長所/短所については説明可能であるが、自身の好きなどころ/嫌いなどころについては説明することが難しかった。このことは、自己理解における

偏りと関連していることが示唆された。3) 自閉スペクトラム症の成人は、自身の行動スタイルに関する自己理解はよくできていた。このことから、彼らの肯定的な自己理解を維持するためには、現在の経験が重要であることが示唆された。

心理劇を通じた変化の検討 多面的自己理解を目的とした 3 年間にわたる心理劇場面の分析を通して検討した。ASD 者 8 名を対象に分析した結果、自身の過去と未来を比較することによる自己理解の深まりが観察された。



(5) ASD 児・者への生涯発達支援について

心理劇については、ASD 児において、児童期を通じて他者との関係で自己をとらえるようになる、自己の否定的な側面に気づく等の変化が見られた。成人においては、児童と比較して自己を多面的にとらえていることが示され、自身の所属や社会人としての自立が自己理解の視点として重要であることが示された。さらに、児童と成人の双方において、自己理解において生じる様々な情動が支援者とグループメンバーによって受容されることを通して、様々な自己理解の在り様が表現された。

発達段階による自己理解の特徴を明らかにするため、ASD の児童と成人に自己理解質問を実施した。1) どのような領域において自己に言及するのか、2) 自己を理解する際に言及する他者との関係性、3) 自己を肯定、否定、中立的に理解するのかが年齢により異なるかについて 2 要因の分散分析を行ったところ、いずれにおいても交互作用は示されず、統計的観点からは児童と成人の間に有意な差は見出されなかった。この結果については、児童は学習技能の向上による変化が大きい一方で、成人においては児童と比べて生活の変化が少ない安定した時期であることが結果に影響していることが推測された。今後の課題として、対象者の日常生活と現在の自己理解の関連を考慮し、さらなる検討を行う必要性が示された。

以上より、ASD に対しては発達段階における特徴を理解し、生涯発達の視点による支援を行う必要性が示された。

(6) 今後の展望

本研究で得られた知見は以下のとおりである。

ASDの情動機能及び自己の発達において臨床実践においては、支援者の介入やグループのメンバーとの関わりを通して調査研究では示されない自己理解の在り方が示されることが明らかになった。このことから、臨床実践及び調査研究という複数のアプローチによってデータを収集・分析することが、ASDにおける自己理解を検討する上で重要であることが示された。

療育場面の時系列分析により、ASD児におけるポジティブな情動表出と療育グループのメンバーに対する視線及び支援者の介入が関連していることが明らかになった。このことから、ASD児の情動機能の発達について、客観的指標を用いた分析により、要因間の関連を明らかにできることが示された。

ASDの児童と成人の比較を通して、自己理解の在り方が発達段階によって異なることが示された。このことから、生涯発達の視点から自己理解について検討する必要性が再確認された。

ASDの情動機能及び自己の発達については、心理劇による支援、宿泊型療育による支援の有効性が示された。

さらに、今後の課題としては以下のとおりである。定型発達児との比較によるASD児における自己理解の特徴の詳細な検討、成人の肯定的自己理解を支援する取り組みの検討、児童及び成人のASDを対象とした縦断的調査及び事例的検討。思春期及び青年期を含む分析による検討も今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

中村 真樹、自閉スペクトラム症における自己と情動機能の発達-自己理解質問と心理劇的ロールプレイングを通じた検討-、純心人文研究、第22号、2016、119-134

中村 真樹、自閉スペクトラム症児における自己理解

-自己理解質問と樹木画テストによる予備的研究-、児童教育支援センター年報第9号、2015、19-27

中村 真樹、自閉症スペクトラム障害児童を対象とした治療教育に関する考察-療育キャンプを通じた自己の発達支援-、純心人文研究、第20号、2014、39-52

中村 真樹、思春期の自閉スペクトラム症児における心理劇的ロールプレイングを通じた情動体験の共有、心理劇研究第38巻、2014、59-69、査読有

中村 真樹、広汎性発達障害児の情動理解及び情動表出を促進する支援について~療育場面の時系列分析による検討~、糟屋子ども発達センター研究紀要、第1巻1号、2013、

[学会発表](計 9件)

Maki Nakamura, Miki Shiroshita, Sayaka Okajima, Misaki FuruKawa, Ena Outo, Naoko Doi, Ayumi Muta, Community support activity for school-age children with autism spectrum disorder and for their parents; necessary consideration and challenges in introductory period, 28th International Congress of Psychology, 28 July 2016, Yokohama, Japan

中村 真樹、自閉スペクトラム症児における自己理解-定型発達児との比較による検討-、日本発達心理学会第27回大会、2016年4月30日、北海道大学

Maki Nakamura, Self-understanding among Adults with Autism Spectrum Disorder, 14th European Congress of Psychology, 10 July 2015, Milan, Italy

中村 真樹、自閉症スペクトラム障害児・者における自己理解、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月21日、東京大学

Maki Nakamura, Support for Life-span Development of Autism Spectrum Disorder through a Psychodrama Focused on Multifaceted Self-Understanding, 14th International Congress of Applied Psychology, 12 July 2014, Paris, France

中村 真樹、発達障害児への体験論的アプローチを考える~心理劇の実践~、日本発達心理学会第26回大会、2014年3月22日、京都大学

中村 真樹、自閉症スペクトラム障害児における自己理解、日本発達心理学会第25回大会、2014年3月21日、京都大学

Maki Nakamura, Psychodrama for Children with High-functioning Pervasive Developmental Disorder, 13th European Congress of Psychology, 12 July 2013, Stockholm, Sweden

中村 真樹、広汎性発達障害児における情動理解の促進、日本発達心理学会第24回大会、2013年3月17日、明治学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 真樹 (NAKAMURA, Maki)

長崎純心大学・人文学部・講師

研究者番号：80531780